



TITLE:

Roles of Action Planning and Coping Planning for Travel Behavior Change(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Hsu-Sheng, Hsieh

CITATION:

Hsu-Sheng, Hsieh. Roles of Action Planning and Coping Planning for Travel Behavior Change. 京都大学, 2017, 博士(工学)

ISSUE DATE:

2017-09-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20686>

RIGHT:

許諾条件により本文は2018-09-01に公開

(続紙 1)

京都大学	博士（工学）	氏名	謝 旭昇
論文題目	Roles of Action Planning and Coping Planning for Travel Behavior Change (交通行動変容におけるアクションプランニング及びコーピングプランニングの役割)		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本研究は、交通行動変容プロセスにおいて意志的要因の交通行動に対する影響、及び意志的要因を高める交通行動プランの自動車利用を減らす効果に焦点を当てた研究である。自動車利用を心理的方略により抑制するためには、交通行動変容プロセスとそれに基づくコミュニケーション手法の検討が求められる。そのためには、動機的要因のほかに、意志的要因としての action planning（アクションプランニング）と coping planning（コーピングプランニング）の役割、及びそれらの要因を活性化することが重要である。しかし、交通行動における coping planning の役割や効果などを対象にした研究は十分に行われていなかった。そのため、本研究は、action planning と coping planning の役割を巡る下記の実践的な研究を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none">□交通行動に対するプランニング要因及びそれらの相互作用の影響□心理的及び行動的变化に対するプランニング介入の効果□Coping planning を導入した行動変容モデル <p>本論文の構成は 7 章から成っており、第 1 章では研究の背景・目的を述べ、第 2 章ではモビリティ・マネジメントの手法、行動理論、交通行動についての既往研究を整理している。第 3 章では action planning と coping planning の測定方法と心理尺度を提案している。第 4 章で上記□についての要因の影響、第 5 章で上記□についての介入効果の分析を行った。第 6 章では上記□についてのモデルを構築した。以下に本論文で得られた知見を論文の構成にしたがって述べる。</p> <p>第 4 章では、交通行動に対する action planning と coping planning の影響を分析した。その結果、action planning も coping planning も公共交通利用に影響を与えることが示された。これに対して、自動車利用に影響を及ぼす action planning と coping planning の相互作用が現れることを発見した。具体的には、action planning は、高い coping planning を立てた通勤者だけの自動車利用に影響を与えている。さらに、高い action planning を立てた通勤者に限って、coping planning は自動車利用に影響を与えている。したがって、action planning 及び coping planning は、自動車利用行動を独立に決定できないことである。</p> <p>第 5 章では、プランニング要因が交通行動に影響を及ぼす可能性があるという知見（第 4 章）に基づいて、1 ヶ月間にわたる社会実験を実施し、個々人の action plan（アクションプラン）および coping plan（コーピングプラン）を要請することの自動車利用削減効果を検討した。action plan と coping plan とは、それぞれ action planning と coping planning を高め、次に自動車利用行動を変容することを目指す介入である。その結果、外部影響を排除できる事前・事後テストの制御設計に基づいて、action plan の介入が action planning にのみ影響を与えたことを示している。しかし、action plan と coping plan を組み合わせた介入は、行動意図、action planning、coping planning に影響を与えた。さらに、その複合的な介入は、自動車利用削減の有効性を裏付けてい</p>			

京都大学	博士（工学）	氏名	謝 旭昇
<p>るが、action plan の介入だけではない。</p> <p>第 6 章では、プランニング要因強化に伴って起こる自動車利用削減の実験的証拠（第 5 章）をもとに、coping planning を導入した行動変容モデルを提案した。このモデルでは、coping planning と実行意図（action planning に特徴づけられる）は、行動変容における意志的要因として扱われた。この推定結果は、実行意図は coping planning の媒介を通じてのみ、自動車利用行動の変化に対する行動意図の効果を媒介するが、coping planning そのものは行動意図の効果を媒介することを示唆している。なお、その両方の意志的要因は、公共交通利用の変化に対する行動意図の効果を媒介することを示している。さらに、行動変容における個々人の action plan と coping plan を組み合わせた介入の有効性は、意志的要因の媒介に起因することを示唆している。これらの知見に基づき、その coping planning を導入した行動変容モデルは、交通行動変容における実行意図の有効性を説明することができる。なお、行動を起こす実行意図及び習慣を解凍する coping planning の異なる役割を明らかにした。</p> <p>最後に、第 7 章は結論であり、本論文の成果の概要をまとめている。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

自動車利用を心理的方略により抑制するためには、交通行動変容プロセスとそれに基づくコミュニケーション手法の検討が求められる。そのためには、動機的要因のほかに、意志的要因としての **action planning** (アクションプランニング)と **coping planning** (コーピングプランニング) の役割、及びそれらの要因を活性化することが重要である。しかし、交通行動における **coping planning** の役割や効果などを対象にした研究は十分に行われていなかった。

当該研究は、以上の問題意識の下に **action planning** 及び **coping planning** の自動車利用行動と公共交通利用行動に対する影響、さらにそれらの意志的要因を高める交通行動プランの自動車利用を減らす効果を考察するものであり、それをもって自動車利用を自主的に抑制して社

会の漸次的な改善を期するものである。

この目的のため、本研究では第一に、交通行動における行動変容プロセスの要因とする **coping planning** を導入し、その要因の測定方法と心理尺度を提案する。

第二に、従来の行動変容のための行動プランの方法と組み合わせて、**coping planning** が活性化される行動プラン手法を開発する。そして、従来の方法に比べて自動車利用の減少でその新たな行動プラン手法の有効性を検証する。

第三に意志的要因を導入する交通行動変容メカニズムを明らかにする。それによって行動意図を実行に移すプロセスを説明できるだけでなく、心理的方略の質的改善にも寄与できるものと期待できる。

以上のとおり、本研究は **action planning** 及び **coping planning** の役割をはじめ、意志的要因を考える交通行動変容メカニズムを明らかにするものであり、今後モビリティ・マネジメントの適切な実施に向けた交通行動変容の基礎的な知見を与えるものであり、異議あるものと考えられる。よって、本論文は博士(工学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年8月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行って、申請者が博士後期課程学位取得基準を満たしていることを確認し、合格と認めた。